

ふる郷もの語

ある地元新聞記者が記録した、
四国山間部集落における幕末から昭和戦前の生活世相

著者：曾我^{そ が せいどう}正堂

編者：曾我^{たけし}健

2023 年 10 月 31 日発売

A5 判 396 頁

本体 3,300 円 (+ 税)

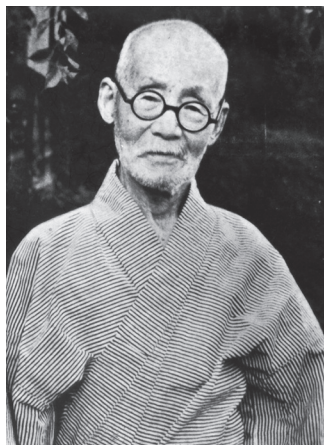
ISBN978-4-89253-654-0



カバー画：遠藤瑞己

曾我正堂が昭和 11 (1936) 年から昭和 16 年まで『愛媛日曜新聞』に連載した随筆。長年の新聞記者生活で培った取材力、観察力、明晰な視点、平易な文体で、彼の生まれ故郷である愛媛県の小さな山村、双岩村鳴山（現、西予市三瓶町）の歴史、習俗、風俗、祭祀、農業、食物、経済、そこに生きた名もなき人々の生活を記した。著者が取材した父太郎市の江戸末期の追想も収録され、幕末から明治、大正、昭和戦前にいたるまでの四国山間部集落における生活世相が記録されている。

曾我正堂（明治 12 年～昭和 34 年）



『曾我正堂文集』に掲載された肖像写真

愛媛県の小さな山村、双岩村鳴山（現、西予市三瓶町）で明治 12 年、代々つづく自営農民の家に生まれた。

明治 34 年、私立東京専門学校高等予科に入学、翌年卒業。次いで早稲田大学（東京専門学校の改名）英文科に入学、明治 38 年 7 月 15 日、卒業した。

卒業後、東京帝国大学内に設けられていた三上参次が主宰する史料編纂室の臨時雇いに採用された。ついで三井の編纂室に転職。しかし激務のため体をこわし、明治 44 年退職し、家族とともに鳴山に帰山、療養に専念した。

一年ほど療養し、伊予日日新聞社に主筆として招かれ松山に出た。その後、『大阪毎日』の通信員を兼ねるようになったが、昭和 2 年に『伊予日日新聞』は廃刊となり、昭和 9 年には大阪毎日新聞社を退職。

その後、国の統制のさまたげにあいながらも方々の新聞に随筆を連載しつづけるが、戦争が激しくなり、松山に空襲がせまったため昭和 20 年 3 月、鳴山に帰郷する。農業をして暮らすが、病を得て、昭和 34 年 12 月 28 日死去。享年 81。（曾我健「解説」を要約）

文生書院

〒113-0033 東京都文京区本郷 6-14-7

電話 03-3811-1683 Fax 03-3811-0296

E-mail : info@bunsei.co.jp



正堂の生家（上方の家屋）。昭和30年代前半撮影



正堂の生家の庭からの眺望。
右前方：谷、左手前の小高い山：獅子高森。昭和44年頃撮影

段々畑のうえの生家

▶ 宇和人に誇りをいだかせる百相の生活文化史

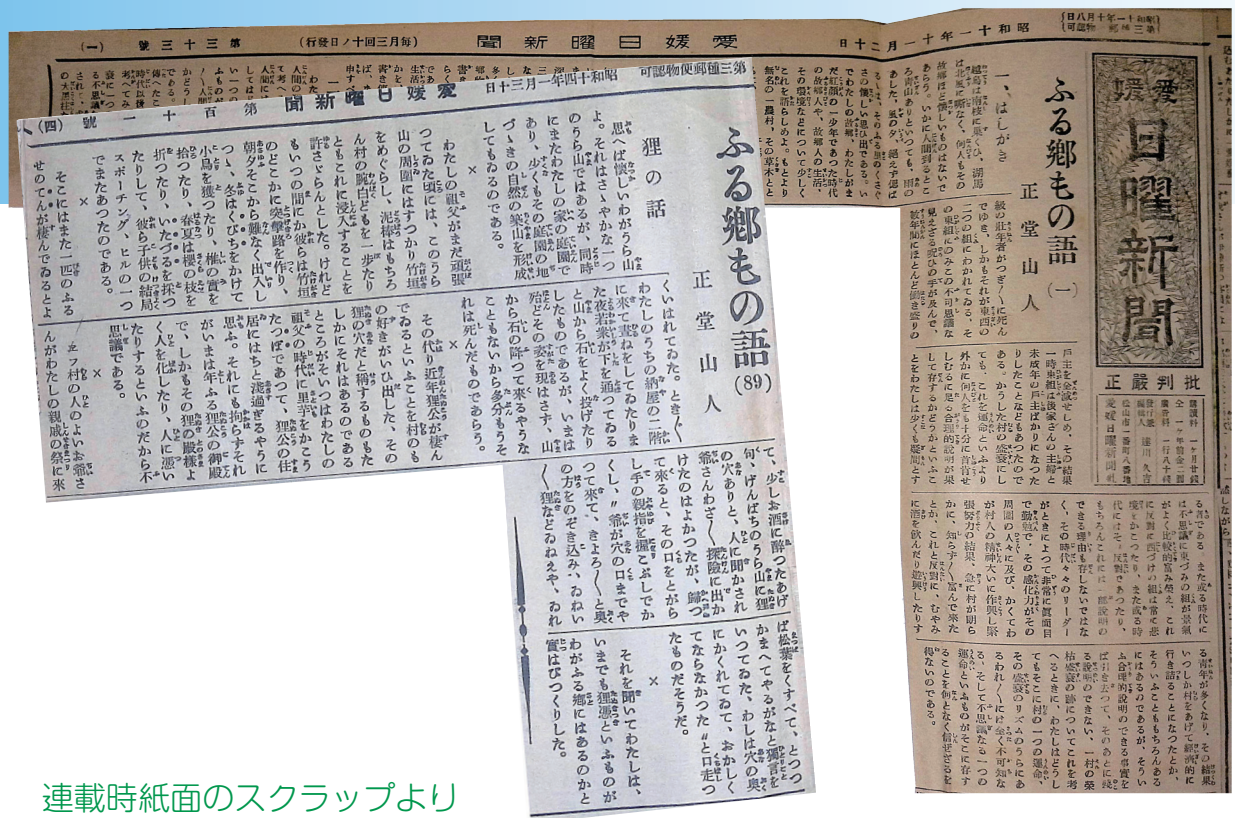
山本武利（一橋大学・早稲田大学名誉教授 NPO 法人インテリジェンス研究所理事長）

曾我正堂は故郷愛媛県西宇和郡双岩村の民生委員、農地委員会長などを務めていたため、1945年、私の入った小学校の隣にあった役場によく顔をだしていたはずである。彼は老体に鞭打って自宅から週何回かは1時間半も山道を徒歩で往復していた。私の家の3代と曾我家とは地縁関係にあった。だが私は自宅前の細道で彼と顔をつき合わせていたはずだが、母や祖父母から彼の名を聞くことはなかった。その関係は孫に記憶されるほどの親密度はなかった。彼がなくなる年に私は彼の名も知らず、高校を卒業して田舎を離れた。

敗戦からの復興を図りながらも、1950年代の日本農村は低所得で呻吟し、戦前のレベルまで回復していなかった。私の育った山村も余裕をもって近隣との交流を図る余裕がなかった。したがって同郷の先輩の異郷での活動を知るよしもなかった。かれらの東京や大阪での活動の情報はほとんど入らなかった。ただ勉強をしなければ、大阪の間屋に丁稚奉公させると周辺から脅されていた。都会の商店や町工場が中学卒の最大の就職先であった。

日露戦争時代に同郷の人物が早稲田大学に進学したことも知らなかった。30年も松山で記者、編集者として活躍した彼の履歴や仕事ぶりは最近『愛媛新聞』の記者を通じて知った。そしていくつかの地元出版社から出た冊子に接した。それらは宇和地方の郷土の文化を愛するベテランの曾我記者によるものであった。しかも双岩村という狭い同郷出身で、地域の風土や文化をけれんみなく記述した同学歴の先輩の本書に感動させられた。

松山で活動しながら、取材活動で疲弊したとき、また冠婚葬祭があったとき、肉親の住む家郷を持ち、「山荘」としてくつろぐことができた著者は幸せであった。また東京や松山の学友と行き来しながら、広い視野で生活文化を分析した彼は、本書によって自身の系譜の人々だけでなく、われわれ宇和人にもその豊かな文化への誇りを与えてくれる。



連載時紙面のスクラップより

▶ 近代史を僻村の観点から捉え直す

山田晴通（東京経済大学コミュニケーション学部教授）

南予の山村集落、鳴山に生を受けた曾我正堂こと曾我鍛は、早稲田大学で英文学を学び、若くして帝国大学や三井家で史料編纂の仕事に従事して、歴史研究家としての素養を磨いたインテリとなった。健康を害して愛媛県に戻ってから『双岩村誌』の編纂にあたりるとともに伊予史談会の設立に参加し、創刊から長く『伊予史談』の編集主任を務めた。以降はもっぱら、ジャーナリストとして活動し、松山で『伊予日々新聞』主筆、『大阪毎日新聞』支局長などとして活動するが、その文筆の根本にあったのは歴史への意識であった。

『ふる郷もの語』は、老境に入った正堂が、少年期の記憶に軸を置きながら、伝聞や史料の掘り起こしをも含めて取り組んだ連載記事である。終着点を意識しない連載記事であり、構成こそ取り留めなく話題が流れるところがあるが、歴史研究者らしい自己批判の目を通して語られる少年期の精緻な記憶は、故郷の人々の人柄を、地域の民俗を、山村生活の細部を、驚くべき説得力をもって活写する。

記述の中では、明治から大正、昭和と、生活が近代化していく過程が、様々な細部への注目の中で随所に読み取れる。食文化や方言、諸々の信仰、年中行事や山村における生業のあり方がいかに変化していったのか、新たな文物がどのように普及し生活を変えたのか、その様子が淡々とした筆致で、また時に愛惜の念を込めて語られる。それは明治以来の近代史を、僻村の観点から捉え直すものであり、中央の視点で語られることが多い近代化の過程について、相対的な視座をもたらすものとなっている。それはまた、正堂が、今を記録し、歴史をつむぐ営為としてのジャーナリズムに忠実であった証左であろう。

なお、併せて収録されている、正堂が最晩年に記した『双岩村分裂記』は、昭和の大合併の大きなうねりの中で翻弄された地方集落の事情を生き活きと描写した小文であり、市町村合併のエピソードとして興味深い。正堂が、その最期まで、ジャーナリストとして歴史を記述することに自覚的であったことを印象付ける文章でもある。

解説 曾我健

ふる郷もの語

はしがき

一村の盛衰

多々羅杏隠

【参考1】多々羅良頼【参考2】医者

左氏珠山

お日待ち

村落の歴史

一家の変遷

祖父の時代

祖父孫之進

歳末風景

元旦

雪の思い出

思い出す人々

二人の大伯父

無名の英雄【参考】迷信

ひねり婆さん

穴井芝居

【参考1】穴井芝居【参考2】お神楽

酒と煙草

猿の婿入り

若衆組

【参考1】若連中【参考2】花見

若衆宿

山田薬師【参考】山田薬師

大峠祭り

【参考1】大峠谷【参考2】大峠祭りのにぎわい

【参考3】相撲

小学時代の1・2

菖蒲の節句

雛の節句

雉子の英知

自給肥料

草刈り

共同田植え

少年雑誌

殺生嫌い

兎狩り

燕の墓

非生臭坊主

農業趣味

榎採り唄【参考】俗謡

七夕さま

盂蘭盆会【参考】盆踊り

疫病よけ

悪疫防御

虫送り

灯籠あげ

最初の兵隊さん

共同浴場

部落生活の革命

台所改善の必要

部落公会堂

アイスクーキ

悪戯の失敗談

懐かしい旧友

山伏さん【参考】置き業

お庄屋さま

お庄屋征伐【参考】老人懐旧談

旧正月

保の木

植林時代

チョン髷奇譚

おはぐろ

パッチと脚絆

筒つば筒袴

帽子のない時代

被りものの変遷

不思議な命

危機一髪

命拾い

運命の神秘

手織り木綿の話【参考】衣食住

贅沢になった食物

幼き頃の思い出

方言の思い出

矯正すべき詞【参考】矯正すべき言葉

方言語彙

【参考】方言学者としての千葉政清について

一、二、三人称

【参考】「双岩村誌」に採録された方言

農村の流転変化

無名英雄伝

伴さんの一族（上・下）

酒豪荒さん親子（上・中・下）

すみとこ家（上・下）

佐平爺さん

樽屋の多平さん

つりい【参考】つりい

しもななか家

歳五郎

思い出の雑煮

若箸

お三宝

おかん酒

老松

うら山

狸の話【参考】げんばち

怪我

双難

橘伍長

夜路

垣内由一伝【参考】吉凶の儀式

字根高三伝

坂本又七伝

東坊子和三郎【参考】東坊子

九十九翁伝【参考】矢野保の今昔

治右衛門伝

弥次郎さんと伊予吉さん

横畑治助伝

やき米

番茶

盛夏のわがふる郷

醬油

若うどたち

夏祭りの思い出

【参考】逆臣河野通治贈位問題

山村の果物

養道さん

癪姫塚【参考】お姫様の墓

五輪塔の歌一首並短歌

【参考】高野聖の墓 鳴山

飯野山城【参考】権の守

幽玄庵【参考】鳴山の庵のこ本尊

竹蔵黒岩六武

岩右衛門

道助爺さん

寺子屋の話

【参考】江戸時代の寺子屋教育の話

木綿織りの話

若刺

帰省日記

錦山秋月居士

旧庄屋無役地事件を解剖す（一〜八）

雨晴峰のサイレン

陰切り即露切り

与さんと美代さん（上・下）

Tの自刃

金利の変遷

宗無居士

飯野古城址に就いて（上・下・補遺）

翁昔がたり（一〜四）【参考】火災

境せり（上・中・下）

おもうし

幻影の演劇

【参考1】村内の娯楽【参考2】芝居

亥の子【参考】亥ノ日

西村嘉助

茅ぶきの農家

馬と牛と鶏

幕末時代の正月風景

薬に依存せる村の生活

通貨の価値

苗字帯刀

土地の話

五人組

春雨の日に

中山と神田

叔父の村

学校の位置【参考】布喜川小学校の沿革

お庄屋征伐の結末

田園まさに荒れんとす

苦汁菜飯

大樹【参考】供養場 鳴山

樟樹

コレクター

迷信

むかしの隣組【参考】お講

むかしなまり

村なまり

麦たたき

散文化する世の中

わが鳴山のお姫様の墓について

半造さん

晩年の祖父

孤独なる盂蘭盆会

おまん法事

ふる郷の味覚

農村生活

双岩村分裂記

三友興亡記（続ふる郷もの語）

特別寄稿

『ふる郷もの語』が伝えるもの

山本武利

あとがき